『経済学批判要綱』の研究

『経済学批判要綱』の研究

内田　弘

新評論

恩師　長洲一二先生に捧げる

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

序章　文明としての資本概念と自由時間……一三
一　「パックス・ブリタニカ」と『経済学批判要綱』……一五
二　「資本一般」と資本回転＝蓄積論……二一
三　経済学批判における古典……二九
1　スミス経済学批判としての『要綱』（二九）
2　ヘーゲル『論理学』と『要綱』の体系編成（三五）
四　自由時間論――『経済学批判要綱』の主題……四二
第一章　経済学の方法を問う……四五
――「経済学批判・序説」の研究
一　個人一般と生産一般……四五
――イデオロギーの経済学批判
二　物質代謝過程と資本一般……五六
三　経済学の方法と体系……七二
第二章　貨幣の発生史と歴史把握……八七
――「貨幣に関する章」の研究
一　「貨幣章」の体系と特徴……八七
――スミス貨幣―商品論の転倒

『経済学批判要綱』の研究／目次

四　貨幣資本循環と資本概念の発生史……一九三
1　資本の文明化作用と制限措定――実現問題とプルードン批判（一九三）
2　領有法則の転回と資本の一般的生成――「疎外された労働」の経済学批判（二〇九）
五　共同体と本源的蓄積……二二八
――貨幣資本循環論における「諸形態」論
1　資本関係の本源的諸前提（二二八）
2　所有の本源的規定（二三七）
3　共同体の三形態（二四一）
4　征服戦争と不自由な労働（二四九）
5　原蓄先行過程（二五三）
6　商業資本の産業資本への転化（二六七）
第四章　資本の回転＝蓄積過程……二七七
――「資本に関する章」の研究（2）
一　「資本の特殊化」の体系と特徴……二七七
二　生産資本の循環と資本時間の短縮……二八〇
――流動資本と固定資本の「一般性」規定
三　資本の回転と資本区分……二九二
――流動資本と固定資本の「特殊化」規定

二　貨幣転化論と人類史……八九
1　貨幣への転化（八九）
2　貨幣関係と人類史――「依存関係」史論（一〇三）
3　「時間の経済」――『要綱』の主題の提示（一一三）
三　貨幣循環と貨幣発生史……一一六
四　貨幣の資本への移行……一二三
――貨幣の自己解体的矛盾
第三章　資本概念の発生史……一四三
――「資本に関する章」の研究（1）
一　「資本の一般性」の体系と特徴……一四三
二　資本と労働との交換……一四六
1　貨幣としての貨幣と資本としての貨幣（一四六）
2　資本と労働との交換（一五二）
三　資本の生産過程……一五九
1　労働過程と価値増殖過程――アリストテレス原因論とマルクス（一五九）
2　剰余価値追求の動機と性格（一六六）
3　相対的剰余価値論の確立――リカードウ批判（一七四）
4　労働の二重機能の把握――経済学批判の旋回軸（一八六）

四　資本の回転と再生産……三〇三
——流動資本と固定資本の「個別性」規定
五　回転循環と恐慌……三一三
第五章　資本と利潤……三二一
——「資本に関する章」の研究（3）
一　「資本の個別性」の体系と特徴……三二一
二　資本と利潤……三三三
——根拠と根拠づけられたもの
三　再生産ファンドとしての利潤……三三八
四　利潤率低下傾向とその阻止の限界……三三一
終章　文明としての資本の歴史的使命……三四三
あとがき　三五五
事項索引　三六五
人名索引　三六八

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

『経済学批判要綱』の研究

「資本の単純な概念のうちには、即自的に、その文明化を行う傾向などが含まれていなければならない。」

「剰余労働すなわち自由に使える時間をつくりだすことが資本の法則である。」

（K・マルクス）

序章　文明としての資本概念と自由時間

これから、カール・マルクスの書いた草稿『経済学批判要綱』(*Grundrisse der Kritik der politischen Ökonomie*)[1]に内在してじっくり読んでゆこう。われわれは『要綱』の部分、部分を全体から切りはなして読まない。その全体をひとつの体系をもった草稿として読もう。『資本論』を知っているからといって、『資本論』を基準にして『要綱』はまだまだこれこれの未熟さと欠陥をもっていると指摘して満足する読み方は避けよう。『要綱』にマルクスが込めた経済学批判の構想を十分読み取り、『要綱』をつらぬく方法態度とはなにかをあきらかにしよう。以上のように『要綱』を読んだ結果、『要綱』のあとに書く「二三冊のノート」(一八六一―六三年草稿)へ移行してゆく必然性も自ら示されてくるのではなかろうか。

このように『要綱』を読んでゆくとき、いったい『要綱』はどのような理論像を結ぶのだろうか。その理論像は端的にいってこうだろう。一九世紀中頃のイギリスを中心とした資本主義像を思い浮べ、それを理論的につかむために、資本一般という最も抽象的な資本の本性に引きしぼり、資本一般を体現する一つの資本が市民社会を組織し発展させ、同時に世界を販売市場と購買市場に転化してゆく構造と過程を描く。その資本一般把握を、古典経済学(特にスミスとリカードウ)を批判し再編成する作業を通して行う。ではいかに古典経済学批判を体系的にすすめてゆくか。その体系を組むさいに、ヘーゲルの『論理学』が活用されよう。以上要するに、一九世紀中葉イギリス資本主義を表象に、古典経済学と古典哲学を批判的に摂取しながら、一つの資本を主体概念にすえて、文明開化をすすめる資本の一般的本性を把握する。これが『要綱』を書こうとするマルクスの基本的な構想である。その構想を実現するときに、資本は生産諸力を高度に発展させて、結局歴史の舞台から消滅し、かわって、自立的な人間諸個人が資本が開発した文明

を変革して継承し、かれらが自由に平等に連合して新しい社会が形成されてくる——このような将来社会への展望がひらかれてくるだろうと想定するのである。以下、『要綱』のなかにいきなり入るまえに、以上のような『要綱』実現したマルクスの学問構想に少し立ち入ってみよう。

（1）『要綱』という名の由来はつぎのようである。マルクス自身は「七冊のノート」のうちいくつかの個所で「経済学批判」を記しているが、つぎのようにエンゲルスやラサールあての手紙で「要綱」(Grundrisse, Grudzüge) とよんでいることに因み、編集者が『経済学批判要綱』と名づけたのである——「僕は経済学の研究のとりまとめで毎晩気違いのように仕事をしている。大洪水〔déluge：恐慌〕までには少くとも要綱(Grundrisse)だけでもはっきりさせるためだ。」(*Marx-Engels Werke*, Band 29, Dietz Verlag Berlin, 1970, S. 225. 以下 *MEW*-29, S. 225. と略記する。引用文中の〔 〕内は引用者注。引用文中の傍点、、、は原文強調、傍点。。。は引用者強調。)

「現在の恐慌は僕を駆り立てて、今年こそは僕の経済学の要綱 (Grundzüge) の仕上げに没頭させる。」(*ibid.*, S. 548)

『要綱』のテキストは次の二種類がある——

1、*Grundrisse der Kritik der politischen Ökonomie* (*Rohentwurf*) *1857-1858, Anfang 1850-1859*. Dietz Verlag Berlin, 1953；2. Auflage, 1974. 高木幸二郎監訳『経済学批判要綱』(五分冊)、大月書店、一九五九—一九六五年。

2、*Ökonomische Manuskripte 1857-58, Marx Engels Gesamtausgabe* (*MEGA*) II-1.1, 1976；II-1.2 mit Apparat, 1981. 資本論草稿集翻訳委員会訳『一八五七—五八年の経済学草稿 (1)』マルクス資本論草稿集 (1)、大月書店、一九八一年。

本書への引用は、後者のメガ版による。引用文の末尾の（ ）内の二つの数は、ディーツ版、メガ版の順で、それぞれのページ数を示す。引用文中の傍点、、、は原文強調、傍点。。。は引用者強調。注でのページ表示は例えば *Gr.* D237, M245. のように示す。原文解釈のうえで、つぎの二つの英語訳を参考にする——

1、*Marx's Grundrisse*, translated by David McLellan, Macmillan, 1971.

2、*Grundrisse : Foundation of the Critique of Political Economy* (*Rough Draft*), translated with a Foreword by Martin Nicolaus, Penguin Books, 1973.

一　「バックス・ブリタニカ」と『経済学批判要綱』

マルクスが『要綱』で経済学を批判してゆくさいに、つねに念頭においているのは、一八五〇年代の資本主義世界、特に「ブルジョア的宇宙の造物主」[1]であるイギリス資本主義である――

「木綿の時代を生み出すことは、その知性と世界市場と巨大な生産力をそなえた十九世紀の仕事だ。」[2]

精紡機の錘は篠糸をブレンドしては引っぱり（ドラフト）、糸にして巻き取る。綿花は綿糸になる。紡績機が大量の綿糸を作るためには膨大な原料、綿花がいる。マンチェスターに搬入される綿花はリヴァプールを経て海外から輸入される。その大半はアメリカ合州国南部の奴隷制プランテーションで栽培されたものだ――

「イギリス工業の決定的な部門〔綿工業〕はアメリカ合州国の南部の諸州における奴隷の存在に依存している。」[3]

もし黒人奴隷が作る綿花で不足ならイギリスの綿業資本は可能な所なら世界のどこにでも、綿花栽培を奨励しないではいられない。つぎつぎと綿花を消費しては綿糸を生み、綿糸を使って綿布を作る。精紡機・織機は休みなく生産し続けることを求めている。

しかし、糸と布の市場には限界があり、ついには過剰生産恐慌がふたたびやってくるだろう。五〇年代のはじめ、一八四八年の革命で敗北してヨーロッパからイギリスに亡命してきたばかりのマルクスとエンゲルスは、一八三七―四二年、四三―四七年、と景気循環五年周期説をとっていて、四八年の五年後の五二年にふたたび恐慌がやってくると予想した。そのときは、革命のときでもある――

「新しい革命は新しい恐慌につづいてのみ起りうる。しかし革命はまた、恐慌が確実であるように、確実である。」[4]

しかしこの予測は外れ続けた。[5]次の年にこそ起ると立てた予測は、五三年、五四年、五五年、五六年と次々と外れ

た。[5] ようやく一八五七年秋に入ってから、大西洋をはさむアメリカ合州国とヨーロッパの全体をまきこむ、最初の世界恐慌（ツガーン＝バラノーフスキイ）[6]がおそってくる。マルクスは、のちにみるように、この時（一八五七年）にいたって、恐慌五年周期説から、一八二五年→三七年→四七年→五七年、という一〇年周期説に変わり[7]、この一〇年ぶりの恐慌時にこそ、一八四七年の恐慌が一八四八年のフランスの二月革命、ドイツの三月革命をよびおこしたように[8]、ふたたび革命運動がおこるだろうと予想し、いまのうちに、この大洪水をひきおこす資本とはいったいなんなのか、その歴史的使命はなんなのかを基礎的につかんでおこう、と考えていたのである。

思えば、イギリスの産業資本家たちは、産業革命をすすめ産業資本の制覇体制をつぎのように一八三〇年代から四〇年代にかけて着々と推進し定着させてきた。普通選挙法改正法（一八三二年）、ビール条令（一八四四年）、関税・財政改革（一八四二・四五年）、穀物法撤廃（一八四六年）、航海条令撤廃（一八四九年）、初期工場法の完成（一八五三年）。

「一八三〇年以後現在〔一八五〇年〕にいたるまでのイギリスの歴史は、彼ら〔産業ブルジョアジー〕が、つぎからつぎへと、彼らにたいする反動的な反対者たち〔地主、船主、金融貴族など〕の連合にうちかっていった勝利の歴史である。……金融貴族は時を誤らず後退した。彼らの後退は、イギリスに二月革命をまぬがれさせた。[9]」

このようにして、綿業資本中心のイギリス産業ブルジョアジーは、これまで利用してきた産業資本育成のための重商主義政策を廃棄し、産業資本へのヘゲモニー確立にみあう自由主義経済政策を定置していった。[10]

それではマルクスがみていた一八五〇年代のイギリス資本主義の再生産構造は基本的にどのようなものであったろうか。最近までの一九世紀中葉イギリス経済研究の一端[11]を参考に、概観すると、おおよそつぎのようであろう。イギリス資本主義の生産力的中枢はなんといっても綿工業に、とりわけ、紡績部門にあった。綿糸の生産性をきめるのは精紡機の錘（スピンドル）の数（と円滑な回転）である。統計数値でみれば、一八四六年一九五〇万本→五〇年二一〇〇万本→五六年二八〇〇万本→六一年三〇四〇万本、と増えてゆく。精紡機の錘を監視し、切れた糸をつなぎ、原料（篠糸）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com